漢語における「主謂謂語句」について(2)

鈴　木　義　昭

前号では，「主謂謂語句」について，諸家の解釈等を概括的に眺めておいたが，今号では，「文革・四人組」以降から現段階までの諸説を報告することにしたい。

〈4〉

「主謂謂語句」の類型は前号で紹介したように，『現代漢語語法講話』（「以下，『語法講話』と略称する）が三種類説を提出して以来，これが大体一つの標準となっている。[1]「文革・四人組」以降，本格的に論じたのが江天「谈主谓词组作谓语」[2] であったという意味で，彼の類型（『现代汉语语法通解』[3] も含める）を取り挙げてみる。

江天は『語法講話』に倣った形で，三種類説を執っている。第一類は

1）作谓语的主谓词组从一个方面或一个角度来述说主语。这类句子的特点是：全句的主语和主谓词组里的主语，有整体和部分或领属和被领属的关系。[5]（謂語となる主謂構文は一方面，あるいは一角度から主語を説明する。こうした文の特徴は，全文の主語と主謂構文中の主語が全体と部分，あるいは従属と被従属というような関係を持つところに在る。）

例①　青年们精力充沛。（青年たちは精力があふれている。）

②　全世界人民心连心。（全世界の人民は心と心が結ばれている。）

③　我国现有的知识分子，一部分是从旧社会过来的，大部分是新社会培养的。（わが国に住む知識分子は，一部は旧社会からやって来

た人たちだが，大部分は新社会が育くんだ人たちだ。）

江天はこの第一類型がさらに三つに分かれると言う（①～③の文はその一つずつを示している。以下の各章でも同じ）。

第一番目のものは，

主谓词组里的谓语是形容词（也有小部分是动词），整了词组对主语进行描述。[6]（主謂構文中の謂語は形容詞〔一部には動詞の場合もある〕であって，連語全体が主語に対して描写・叙述を行なう。）

とあるように，述語となる品詞を形容詞と一部の動詞とに限定する。形容詞の詞性から考えるならば，むしろ描写の方に重点が置かれることも当然と言えよう。現に，例文と同時に挙げた日本語訳では，「て」＋「いる」の形式に訳すことが多かったが，「て」＋「いる」の構文は日本語では，動作を表わすというより状態の叙述になっており，すでに形容詞に近い働きをしている点を想起していただきたい。[7]

ただ，従来時として行なわれたような，「青年们的精力充沛。」の文に変えて，「精力」が主語で，「青年们」をその修飾成分とする解釈の仕方は厳に戒められている。これでは陳述の対象が異なることになってしまう。つまり，元来は「青年们」が対象でなくてはならないのに，「精力」が対象となってしまうわけである。この点で，日本語の「象は鼻が長い。」の文を「象の鼻が長い。」に改めるのと全く同じ結果になると言えよう。「鼻が長い」はあくまで「象」の属性を説明しているからである。

第二番目の例は，

主谓词组的格式是主宾同形结构，整个词组对主语进行描写。[8]（主謂構文の形式は，主語・賓語同形の構造であって，すべての構文は主語に対して描写を行なう。）

として，他に「咱们不能各顾各。」（われわれはめいめい自分のことばかり考えてはおられない。）の例も挙げている。②の訳文ではこの構文を表わし切れないきらいがあるが，直訳して「世界人民は心が心と結びあってい

る。」や「われわれはおのおのがおのおののことばかり考えてはおられない。」などのようにすれば，理解することができよう。「心连心」・「各顷各」はともに，主語と賓語が同形になっていると同時に，連語の形で述語を形成しているわけである。これは日本語の「彼は足が棒になってしまった。」や「私は顔から火が出るようだった。」などの慣用表現ともよく似た構造[9]であって，いずれも主体を描写・叙述するという意味では，極めて形容詞的であると言うことができる。

第三番目のものは，

分项列举，共同述说主语。[10]（項を分け列挙して，ともに主語を説明する。）

とあるように，その例文では「是～（的），是～（的）」あるいは「～的～，～的～」の並列構文を取りながら，主語を説明しているのである。「一部分是旧社会过来，大部分是新社会培养的」の中には，日本語の「兄は背が低くて，弟は背が高い。」と同様の，「対比」の意識が働いている[11]ようにも思われるが，江天はそれには触れていない。「是～，不是～」の構文では，すでに「対比」についての指摘が見られる[12]わけで，江天は恐らく職能については敢えて言及しなかったものであろう。

以上紹介して来たような第一類型は，諸家の意見の最もよく一致したもので，邢福義はこれを「纯主谓谓语句」と名づけているほどである（「论现代汉语句型系统」[13]）。意味するところは「純粋な主謂謂語」というのであろうが，もし，他のものが純粋ではないとする意図が見えるとするならば，誤解を招き易く，一考ありたい命名ではある。要するに，江天は『語法講話』に見える「主謂謂語中的主語和全句的主語有关系」（主謂謂語中の主語は全文の主語と関係がある）を承けて，「従属」，「被従属」という概念を付け加えたのではあるまいか。何故ならば，『語法講話』は「詞序」（語順）という位置関係に重点を置く傾向があったわけで，それを補なう意味もあったのであろう。[14]

一方，孟維智は次のような四点を満足させるものを，江天の第一類型と同じ主謂謂語句と考えている。[15] すなわち，

1　Nx 和 N 具有領属关系。(Nx〔文の冒頭に来る名詞〕と N〔文中に来る名詞〕には従属関係がある。)

2　Nx 既非施事又受事，它不跟 V 直接发生关系，而跟“N・V”这个整体发生关系。(Nx が施事〔主体〕でなくて受事〔客体〕である時，それは V と直接に関係を持ち，しかも「N」・「V」全体と関係を持つ。)

3　“N・V”构成主谓词组，具有描写性或说明性，是陈述 Nx 的部分。(「N」・「V」は主謂構文を構成し描写性あるいは説明性を持ち，Nx を陳述する部分である。)

4　V 一般是形容词，也可以是动词。(V は一般に形容詞であるが，動詞であってもよい。)

これによって，江天の①～③の例文を比較してみると次のようになる。

青年们　精力　充沛。
Nx　N　V(adj)

全世界人民　心　连　心。
Nx　N　V　O

我国现有的知识分子，一部分　是　从旧社会过来的，大部分　是
Nx　N　V　O　N　V

新社会培养的。
O

となって，1～4までの諸条件を満たしていることが分かるであろう。

注(1)　前号「漢語における『主謂謂語句』について」(1)(『ILT NEWS』・Vo. 77, p. 64 以下)。

(2)　原載『辽宁大学学报』(1978年)，今『现代汉语資料选编』(罗常埼等著，甘肃人民出版社，1981年6月)による。

(3)　辽宁人民出版社，1980年12月刊による。

(4) 『语法探究和探索』・Vo. 2（北京大学出版社，1984年4月）所収。
(5) 注(3)に同じ
(6) 注(3)に同じ
(7) 佐治圭三，「共起の条件」(『論集日本文学・日本語5』) 等による。
(8) 注(3)に同じ
(9) 慣用句においては，日中両語ともその結びつきが強く，構成要素の間に別の語を入れることはむずかしい。
(10) 注(3)に同じ
(11) この点については，前号でも触れておいた（p. 67)。
(12) 商務印書館原板改・編簡約『基础汉语』等による。
(13) 『語法研究和探索』・Vo. 1（北京大学出版社・1983年12月）
(14) 注(1)に同じ
(15) 注(4)に同じ

〈5〉

江天は第二類のものに対して，次のように述べる。

2) 主谓词组里的谓语是动词，在意义上能支配全句的主语（大主语）或主谓词组里的主语（小主语)。[1]（主謂構文中の謂語は動詞であって，意味の上からは全文の主語〔大主語〕，あるいは主謂構文中の主語〔小主語〕を支配することができる。）

例④ 那里的情况他特别熟悉。（そこの事情は，彼は特によく知っている。）

⑤ 这个道理，任何人都能讲得清清楚楚。（このような道理は，いかなる人でもはっきりと話すことができる。）

⑥ 党中央事事做在人民的心坎心。（共産党中央委員会はあらゆることを，人民の本音にもとづいて行なう。）

⑦ 党委书记政治思想工作要抓，教学工作要抓，后勤工作也要抓。（党委員会の書記は，政治思想工作はしっかりやらなくてはならないし，教学工作はしっかりやらなくてはならない。後方勤務工作もしっかりやらなくてはならないのだ。）

〈2〉においてすでに述べておいたように,[2]『語法講話』はこうした文について,「賓語の倒装」という解釈を捨て切れずにいたわけである。それに対して,江天はここに挙げた④～⑦の諸例をいずれも明確に主謂謂語句と断定している。すなわち,

全句的主语在意念上是受动者。[3]（全文の主語は,意識の上からは動作を受けるものである。）

および,

主谓词组里的主语在意念上是受动者。[4]（主謂構文中の主語は,意識の上からは動作を受けるものである。）

という,どちらかいずれかを満足させる句式は主謂謂語句と認められることになる。④において,

大主语在意念上是受主谓词组里的谓语支配的。[5]（大主語は意識の上からは,主謂構文中の謂語の支配を受けているのであるである。）

から,主語である「那里的情况」は小謂語の「熟悉」の支配を受けることになる。

⑤において,動詞「讲」は「清清楚楚」という補語を持ってはいるが,

任何人都能讲这个道理能讲得清清楚楚。[6]

の倒装ではないとする。その根底には,

词序是汉语的重要语法手段,句子分析不能光从意义出发,必须以结构作为主要依据。[7]（語順は漢語における重要な文法的手段であり,文の分析においては全く意味だけから出発することはできず,構造を主たる拠りどころとしなくてはならない。）

との認識があるからである。

江天はこういう場合の動詞を他動詞に限定しないが,鄧福南のように,

主谓结构的谓语是及物动词而没带宾语,在意义上能支配全句的,……。[8]（主謂構造中の謂語は他動詞であって,しかも賓語を持たなくても,意味の上からは全文を支配することができる,……。）

としたり，華宏儀のように，

作谓语的主谓词组里的谓语是他动词，后边没带宾语，全句的主语在意义上受这个动词的影响或支配。[9]（謂語となる主謂構文中の謂語が他動詞であって，後ろに賓語を伴なわない時，全文の主語は意味の上からこの動詞の影響あるいは支配を受ける。）

と，明らかに動詞を他動詞に限定することもある。動詞を他動詞に特定することは，賓語の倒装説の肯定につながる可能性を含んでいることになるわけだが，両者とも以上の条件のもとでは主謂謂語句であると断定するのである。

⑥において，意識の上から主謂構文中の謂語の支配を受けるのは大主語ではなくて，小主語であるという。したがって，「做」という謂語は「事事」を受けることになり，「党中央」は「事事做在人民的心坎心」を謂語とするという論法になる。同様にして，⑦は「列挙して叙述する」働きをしていることになる。

結局，

一般的语法书都看成是宾语前置，然而，这是极不妥的。因为，语法分析不该以意义为主要依据，也不该妄立“标志”（即条件）。[10]（一般の文法書はいずれも賓語の前置とみなしているが，これは全く妥当性を欠く。というのも，文法分析は意味を主要な拠りどころとすべきではなく，妄りに「標準」〔つまり条件〕をたてるべきではないからである。）

として，賓語の倒装説を否定する方向を取っていると言えよう。

なお，日本語においても同様の例があることについては，〈2〉でも触れたとおりである。[11] さらに，「孫は祖母が育てた。」の文では，「育てる」という他動詞が述語であるとともに，「孫」はその対象となる。「祖母」が述語の行為の主体であり，「孫」はその行為の対象となっているわけである。また，⑦と同じ構造のものとして，「我这个人见过，那个人也见过。」（私はこの人は会ったことがある，あの人も会ったことがある。）が引かれて

いるが，こうした「～也都～」・「连～也（都）～」・「什么～也（都）～」の構文を入れるのは，『語法講話』の丙類とも同じである。[12] この「也」は日本語の助詞「も」に相当するもので，松下大三郎が「は」と並べて論じている[13] のも興味深い。

江天の第三類は以下のように説明される。

3） 主语是主谓谓语叙述的情况所关涉的对象。[14]（主語は主謂謂語の叙述の情況に干渉を受けた対象である。）

例⑧ 这个问题，研究的人太多了。（この問題は，研究する人が大変に多い。）

⑨ 新的操作方法，现在能掌握的人不儿个。（新しい操作方法は，今マスターしている人は数人にとどまらない。）

こうした句式をめぐって，これまでに大きく言って三つの説が提出されている。一つは呂叔湘・朱徳熙が唱えた「游離成分」説である。これは，

有些句子头上有一个成分，不但独立在句子组织之外，并且不跟句子里边的哪一了词联系，不能算是外位语。[15]（ある文の冒頭に在るが，文の組織外に独立しているわけでもなく，文中のいかなる語ともつながりを持たず，提示語とも考えられないもの。）

を言う（『語法修辞講話』）。

また，王力はこうしたものを「関係語」と呼んだ[16]（後，「関係位」と改める）。関係語とは，

凡首品詞或首仂語用来限制謂語者。[17]（あらゆる品詞，あらゆる連語がそれを用いることによって謂語を限定することになるもの。）

のことを言う。「游離成分」といい，「関係語」といい，ともにそれなりの理由はあるようだが，前者には機能的な面での説明に欠けているようであるし，後者にも述語の修飾成分というだけでは，やはり説明不足の感は否みがたいように思われる。ただ，王力説の謂語限定という意味では，日本語の「は」が以下に来る終止と相呼応する[18] 点で類似点を持っており，興

味深く思われる。

今一つは，一般の文法書に見られる「关于」・「对于」といった介詞の省略説であるが，これについては，今は触れない。

鄧福南の以上三説に対する批判には相当鋭いものがある。游離成分説は最終的に「在这件事上」あるいは「关于这件事」と同じ意味に取る以上，介詞構造となって主謂謂語句ではなくなってしまう。また，関係位説もそれが謂語の修飾作用をする以上，状語となってしまい，主謂謂語句ではなくなってしまうと言う[109]のである。

江天の第三の類型に対する解説は，前二類に比べて多少明快さに欠けるように思われるが，やはり，介詞「关于」・「对于」がついているために介詞構文となり，主謂謂語句でなくなってしまうとか，「这」・「那」といった限定語が付くことが多いと説明する点では，鄧福南と同じである。確かに，「これ」・「あれ」が付くことによって，他のどれでもない「これ」・「あれ」であることを表わしていることになる。

一方，孟維智は次の諸点を満足するものを主謂謂語句と断定する（〈4〉で挙げた条件も含める。）[109] まず，意味上からは，

1　Nx 和 "N・V（・O)" 具有被陈述和陈述的关系，即 "N・V（・O)" 表示的内容属于 Nx，对 Nx 起描写或说明的作用。(Nx と「N」・「V」・(「O」) に被陳述と陳述の関係がある。つまり，「N」・「V」・(「O」) の表わす内容は Nx に属し，Nx に対して描写あるいは説明の作用を起こす。)

2　Nx 和 N 有领属关系或全体与部分的关系，如果没有这种关系，"N・V（・O)" 就必须是个熟语，或具有描写性和比喩性。(Nx と N とに従属関係あるいは全体と部分との関係がある。もし，こうした関係がない時には，「N」・「V」・(「O」) は必ず熟語であるか，描写性と比喩性とを持たなければならない。)

3　Nx 既非施事，又非受事，它不跟 Va 直接发生关系，而跟 "N・V

(・O)”这了整体发生关系。(日本語訳は省略)

4　N 和“V (・O)”具有被陈述和陈述的关系。(N と「V」・(「O」)とには被陳述と陳述との関係がある。)

の四つ，形式方面からも次の五点である。

5　采取“Nx・N・V (・O)”的词序の。(「Nx・「N」・「V」・(「O」)語順を取る。)

6　在 Nx 和“N・V (・O)”之间可以停顿或挿入状语性成分。(Nx と「N」・「V」・(「O」) の間に停頓や状語的成分を挿入してもよい。)

7　不能在 Nx 和 N 之间加结构助词“的”(或者加了就改变句子的原意和结构)。(Nx と N との間に構造助詞「的」〔あるいは加えれば文の原意と構造とが変ってしまう〕をつけ加えることができない。)

8　不能在 Nx 前后加“在……中”等(或者加了就改变句子的原意和结构)。(Nx の前後に「在……中」等〔あるいはつけ加えれば文のもとの意味と構造とが変ってしまう〕をつけ加えることができない。)

9　不能在 Nx 前边加介词“关于”“对于”等。(Nx の前に介詞「关于」・「对于」等をつけ加えることができない。)[21]

以上の観点から見れば，江天の挙げた第二・第三類型の例文はいずれも主謂謂語句ではなくなってしまうのである。

注(1)『现代汉语语法通释』(前出)
(2)「漢語における『主謂謂語句』について」(前出，p. 66)
(3)　注(1)に同じ
(4)　同上
(5)　同上
(6)　同上
(7)　同上
(8)『汉语语法专题十讲』(湖南人民出版社，1980年 6 月)
(9)『注实用汉语语法』(山东人民出版社・1980年10月)
(10)　注(1)に同じ
(11)　注(2)に同じ (p. 67)
(12)『现代漢語語法講話』(前出，p. 25)

(13) 『改撰標準日本文法』
(14) 注(1)に同じ
(15) 『語法修辞講話』(商務印書館・1952年, p. 23)
(16) 『汉语语法纲要』(原1946年開明書店・今, 上海教育出版・1982年2月版による)
(17) 同上
(18) 「は」は係助詞としての働きを持ち文の終止に係わりを持つ。
(19) 注(9)に同じ。
(20) 前述。
(21) 『语法探究和探索』・Vo. 2 (北京大学出版社, 1984年4月 p. 76)

〈おわりに〉

現代漢語の述語形式が, 大きく言って四種類と考えられていることについては, すでに前号で述べたとおりである。体詞謂語句・動詞謂語句・形容詞謂語句そして主謂謂語句である。それに対して日本語の場合は, 主謂謂語句に当るものを欠いている。何故ならば, 漢語の主謂謂語句自体もその述語成分として, さらに名詞謂語・動詞謂語・形容詞謂語を持っているのであって, 日本語の述語分類の中に特別に主謂謂語句を置かないのも, それがすでに如上三種の中に包括されているからであろう。しかも, 漢語においては, 位置関係が品詞とその職能とを決定するとさえ言えるのに対して, 「は」・「が」などの助詞の作用が無視できない日本語とでは, 自ずから差異が出てくるのも当然と言える。Nx + N + V の形式に合致しさえすれば, 形式の上からはすでに主謂謂語句が出来上がってしまうと言っても過言ではない。各文法家の理解によって, 種類も広範多岐に亘り, 分類に煩雑さがつきまとうことについては, 本稿を見れば一目瞭然である。「主語賓語」論争のあと, かなり長期間本格的に手がつけられなかったのも, 恐らくはこれによるであろう。単純に図式化すれば, 江天が主謂謂語句を積極的に認め, その種類を増加させる立場に立っているのに対して, 孟維智はそうした傾向に対する一種の歯どめをねらう陣営にいると考えら

れる。

私自身は日本語の古文の中に「象鼻長し。」の構文が存在する以上，古代漢語にまでさか上ることができるのではないかと推測している。また，日本語から漢語へのアプローチを試みる時，「は」・「が」の問題，すなわち既知の情報・未知の情報の概念の導入も一つの手掛かりを与えてくれるであろうが，後稿を期したい。